

令和 2 年 4 月 21 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04798

研究課題名（和文）リテラチャー・サークルを取り入れたアクティブ・ラーニング型授業の研究

研究課題名（英文）The benefits and challenges of active learning using literature circles in Japanese EFL classes

研究代表者

立松 大祐 (Tatematsu, Daisuke)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：10756828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：新学習指導要領では主体的・対話的で深い学びの実現が求められ、英語教育においてはコミュニケーション能力育成のため、統合型言語活動を授業の中心にする等の改善が提案されている。リテラチャー・サークル（LC）は、英文を読み、その内容について話し合う活動であり、コミュニケーション能力を総合的に育成できる統合型言語活動である。大学生への実践研究の成果を踏まえ、中学校でLC授業を実践するまでに行うべき言語活動として、問答ゲーム、フリーレスポンス、リテリングを位置づけた。また、読みの役割準備、ミニ・レッスン、ジグソー学習、話し合い活動、振り返りからなる循環型指導モデルを開発し、話し合い活動のデータ収集を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リテラチャー・サークル（LC）は「主体的・対話的で深い学び」と英語コミュニケーション能力の向上を実現できる言語活動であると考えられる。その意義をアクティブ・ラーニング、協同学習、外国語不安、インタラクション仮説、足場かけなどの理論的概念と関連づけて理論的研究を行った。英語を外国語として学んでいる日本でのLC研究は限定的であったため、特に、中学校段階で効果的に実施できるように、その設定や活動手順を変更し、第2言語学習支援のための工夫を加えた実践方法と授業モデルを提案した。中学校でのLC授業モデルの提案は、地域の中学校の教員やLC活動に興味をもつ教員らによる実践と授業改善が期待される。

研究成果の概要（英文）： The new course of study asks teachers to incorporate proactive, interactive and authentic learning into English classes. Literature circles (LC) refer to student-led collaborative group discussions about readings and have great potential to provide a key teaching strategy to help make classes more active and communicative. The use of LC in Japanese university EFL classrooms had positive effects in enhancing students' perception that they could improve their English skills. We suggested a procedure for introducing LC and also observed English classes using LC at the junior high school.

We demonstrated the value and power of LC especially with regard to the development of students' communication abilities and as a way to provide a better classroom learning community. Also, we pointed out the need to explore carefully the challenges of how we can improve the quality of the students' conversations through case studies.

研究分野：英語教育学

キーワード：リテラチャー・サークル アクティブ・ラーニング 協同学習 英語授業改善 話し合い活動

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 文部科学省が発表した「平成 27 年度英語教育改善のための英語力調査事業報告」では、中・高等学校とも英語 4 技能において国の目標到達レベルに達していないことが明らかになった。しかしながら、質問紙調査によると「話すこと」の得点が高い生徒は、低い生徒と比べて「授業で英語による話し合いを取り入れている」と回答した割合が高いという結果が出ている。つまり、英語で話し合う活動を取り入れることは、コミュニケーション能力の育成につながることを示唆している。新学習指導要領では、発表、討論、交渉など言語活動の高度化が示されている。さらに、学習者を自ら積極的に知識を獲得する能動的な存在と捉え、自律的学習を促すことも求められている。したがって、今後の授業方法は、4 技能を意識したアクティブ・ラーニング型の言語活動を積極的に取り入れることが必要である。そこで、本研究ではアクティブ・ラーニング型言語活動の実践的研究を中学校で行うことにした。

(2) リテラチャー・サークル(LC)とは、学習者が読んでいる本について議論したり応答したりする活動である(Daniels, 2002)。アメリカの L1 教育での実践を出発点としており、わが国においては、すでに国語科教育の「読むこと」などの学習指導に取り入れられており、その指導と実践の広がりが期待されている。しかしながら、英語教育においては LC 実践と研究は限定的な現状である。物語などを読み、その内容について英語で話し合う活動はコミュニケーション能力を総合的に育成できる技能統合型の言語活動である。教科書に読み物教材が準備されていることが多い中学校の英語教育においても実践できる活動である。LC を活用した指導は、教師主導による T/F や Q&A などの発問、さらには英文訳読などの内容理解や音読指導という従来の手法を変える可能性があるものである。つまり、LC とは、学習者中心のグループによる協同学習を基本とし、読み物を材料として学習者同士が英語で意見交換などを行って理解を深める技能統合型言語活動であり、学びの質的転換を図る学習活動である。

### 2. 研究の目的

アメリカのリテラシー教育を出発点としている LC の取組を、英語コミュニケーション能力向上のための教授法として導入できるか検証する。先行する大学生への LC 実践から見える課題を解決することにより、中学校の英語授業改善のための有力な教授方法として提案したい。次の 3 点が主な研究目的である。

- (1) アメリカの教室で実践されている LC の取組から、日本の中学校の英語教育に取り入れる内容や方法、実施可能性を研究する。
- (2) 大学、中学校において LC を取り入れた実践を行い、実際の教授法を開発する。
- (3) LC 指導は総合的なコミュニケーション能力を育成するための効果的な方法か検証する。

### 3. 研究の方法

LC を取り入れた授業が、英語コミュニケーション能力向上のための有効な教授法であるか検証し、中学校の英語授業改善に向けた効果的な指導法を開発するため、まず、主にアメリカの L1 教室の LC 実践についての文献研究を行い、理論的背景と指導方法の詳細を調査する。次に、先行している大学生への LC 実践から、実際の指導手順と方法を検証し、中学校での指導が可能になる指導手順を考案する。3 つ目に、中学校での授業実践を通して、多くの教室で指導可能な授業モデルづくりを行う。最後に、LC での話し合い活動を録音・録画したデータを分析する。

#### (1) 文的研究

日本では LC を英語教育として実践研究を行っている例は少なく、特に、小・中・高校生を対象にした先行研究は少ない。そこで、主にアメリカでのリテラシー教育実践、それを英語教育に応用した他国の実践について文献研究を行う。

#### (2) 授業観察

日本国内の英語教育実践において、LC をシラバスに組み込み定期的な実践している報告例は見られない(2016 年当時)。そこで、リテラシー教育としての実践が行われているアメリカやオーストラリアの教室を観察する。アメリカでは小学校から大学までさまざまな発達段階での指導例が見られる。オーストラリアでは小学校での実践例が多くみられる。授業観察から、LC における教師と学習者の役割、授業外学習も含めた実際の指導方法、言語発達や話し合い活動の評価方法、語彙や文法指導の方法を調査する

2017 年度から愛媛大学教育学部附属中学校では 3 年生を対象に LC の実践が始まった。中学校教員が指導する授業を観察し、授業の構成や生徒同士の話し合いの実態から指導方法の改善を行った。

#### (3) 授業実践

本研究に先行して愛媛大学教育学部生を対象にした LC 学習の効果と課題を把握する研究(立松, 2016)では、学生は積極的に自分の読みの役割を果たし、外国語教育の場面においてアクティブ・ラーニング型授業として機能することが確認された。また、アンケート調査によると、学生は LC により英語の各技能が向上し、コミュニケーション能力を高める可能性があることと認識し

ていることが分かった。その他のデータも踏まえ、大学生を対象とした指導の改善に努め、中学校での効果的な指導方法を開発する。

愛媛大学教育学部附属中学校の生徒を対象に、教科書英文を使用した LC 指導を行う。実践の目的や方法を中学校教員に伝え、クラスの実態に応じて指導が行われた。2017 年度と 2018 年度は中学校 3 年生で指導され、2019 年度には中学校 2 年生で指導された。これらの授業実践の取組から LC 指導手順と授業モデルの開発を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) LC 授業までに行う言語活動

リテラシー教育としての LC 実践の文献研究とアメリカ及びオーストラリアの小学校などでの授業観察、大学生を対象にした授業実践の成果と課題を踏まえ、中学校の英語教育で実践可能な指導手順と計画を考えた。LC では、読んだ内容について自分の気持ちや考えを書いたり話したり、他のメンバーへの質問を考えたり、それらの意見や質問を聞いて即座に応答するといった、言語の実際の使用場面に近いコミュニケーション能力が必要である。これらの能力は、日々の計画的な学習の積み重ねによって身に付くと予想されるものである。本研究において、LC 実践を行うためには、次の(1)～(3)に示す言語活動の継続的な取組が、話し合い活動に必要とされる基礎的な知識と技能の育成を促すと考える。

##### 問答ゲーム

問答ゲーム(三森, 2013)とは、生徒はペアになり、あるテーマについて一方の生徒が話した後、もう一方の生徒は情報を整理するため、5W1H を意識した質問を行う。その質疑応答を繰り返し、話の型と論理的思考力を養うことができるゲーム的要素のある言語活動である。愛媛大学教育学部附属中学校では、「主語・動詞を入れた整った文で話すこと」、「理由や意見を区別すること」、「ナンバリングを使って話すこと」などのルールで指導を行っている。この活動をとおして、事実を問う、理由・目的を問う、状況を問うなどの話型とそのための英語表現(特に、定型表現)を身に付けることができる。賛成や反対の意見を表現する、理由や具体例を説明する表現(例: I agree with... / I think so, too. / I also think that ... / I disagree with ... / I don't think so. / I don't think that ... I see what you mean, but ... / I see your point, but ... / You may be right, but ...など)を、実際の使用場で使う練習を行う。十分に慣れ親しみ自動化された表現を使うことは、生徒の認知的負荷を軽減し自分の意見を組み立てやすくする余地を生む。聞き手にとっても同様であり、相手の発言内容と伝達意図を把握しやすくするのである。

##### フリー・レスポンス

フリー・レスポンスとは、英文内容を聞いたり読んだりした後、その内容について生徒が自由に意見や気持ち、話の展開の予測、重要な場面の絵を描くなどの即興的な自己表現を行うものである。活動はペアまたはグループで行い、意見交換をすることができる。書く英語の単位は生徒の英語力に応じて、語句レベルから複数の文レベルである。この活動においても、よく使われる定型表現を提示することが生徒の学習を助ける。聞かせたり読ませたりする英文は、教員が全体をいくつかのパートに分けて分量を調整する。本活動はリスニングやリーディング活動に即興のライティングとスピーキングを取り入れた技能統合型言語活動である。また、生徒の意見を引き出し、他の生徒とその意見についてのやり取りをすることによって、英文の表面的理解から深い理解へと促す活動となり、「主体的・対話的で深い学び」を実現することができる。

##### リテリング

リテリングとは英文の内容理解と音読練習を行った後に、内容について数語のキーワードや絵などの視覚情報を補助的に使用し、英文を再話する言語活動である。内容理解の把握と、ある程度の量の英語を話す活動になる。指導の初期段階はリテリングの基本形を踏まえて指導を行い、生徒が慣れると応用的な指導として、内容について生徒が感じたことや意見を加えて表現できるようにする。リテリング後に話を聞いていた生徒と質疑応答を行い、即興のやり取りが生まれるよう工夫することが求められる。

##### (2) LC の指導手順

文献研究、授業観察、授業実践の成果から中学校で実施できる指導手順のモデルを作成した(立松・河野, 2020)。LC の話し合い活動は次の ~ の循環型での指導を基本とする(図1)。

##### 読みの役割シートの準備

生徒は 4 人グループで、それぞれに異なる読みの役割(Questioner, Summarizer, Connector, Illustrator)に分かれ、ワークシートの指示に従って英文を読み、シートを完成させて話し合いのための準備をする。それぞれの役割内容の概要は以下のとおりである。

Questioner: 英文の内容について、内容理解の質問や話し合いを生じさせるための質問作成を行う。質問は T/F 形式、Yes/No 形式、Wh- の形式で作成する。

Summarizer: もとの英文の半分から 3 分の 2 程度の分量で本文の要約文を作成する。

Connector: 英文の内容と読み手の経験、社会での出来事などとのつながりを探す。

Illustrator: 英文内容を理解する上で重要な場面や印象深い場面をイラスト化する。

生徒に話し合い活動の前に読みの役割シートを書かせることは、英語で話すための足場かけになる。つまり、ワークシートに書くことは生徒の生活経験や興味とつなぐだけでなく、語彙や

文法などの言語能力とコミュニケーション能力を育成しているのである。ワークシートの準備は授業外での課題とし、授業では話し合い活動を中心に行うのが理想的である。LC 指導の初期段階では、それぞれの役割で何をどのように書くかについて丁寧な指導が必要である。中学校での導入時では、各役割の内容に即しての練習を数時間かけて行った。生徒が役割シートの作成に慣れると家庭学習として課することができる。

#### ミニ・レッスン

ミニ・レッスンは LC の話し合い活動を行う前に、活動に役立つ表現を学習したり、前回の LC を振り返り、生徒が達成できたことや改善点などを確認したりする指導である。グループの話し合いはタブレット端末や 360 度カメラを用いて、誰が何を話しているのかを録画する。データはロイロノート・スクールを活用し、サーバーに保存する。次時のミニ・レッスンでは、クラス全体で録音されたやり取りを聞かせ、評価したいものや改善点を共有させる。それに加え、やり取りを文字起こしした資料を作成し、聴覚と視覚の両方で要点を把握させる。生徒は互いの話し合いの内容や英語使用について客観的に確認することができる。つまり、ミニ・レッスンは、学習を振り返り、主体的に課題解決方法を考えることができ、自己教育力を高める取組となっている。

#### ジグソー学習

LC の 1 グループは 4 人で構成され、生徒は Questioner、Summarizer、Connector、Illustrator の役割を担当する。グループでの活動前に、同じ役割担当の生徒で小グループを作り、準備してきた役割シートの内容確認などを行うジグソー学習をする。例えば、Questioner のグループは個々に作成した質問の内容や形式の正しさ、推論発問の論理性などを確認するのである。また、話し合いを深めることができる質問を共有することもできる。この例のように役割ごとの学習が行われ、話し合い活動の準備が行われる。ジグソー学習は、自分の努力や責任がグループやクラスの学習に貢献できるという生徒の学習動機を高める効果がある。

#### LC の話し合い活動

生徒はジグソー学習から話し合いのための 4 人グループに戻り、英文を題材にした話し合い活動を行う。話し合いは 10～15 分間程度であり、その間はほぼ生徒だけで話し続ける。Summarizer が進行役を務め、まずは、英語で教科書本文の要約を口頭で発表する。その後、他の役割の生徒に話す順番を割り振るようになる。この言語活動は事前準備した英文の発表と、その発表についての感想や質問、それから発展する意見や考えのやり取りで成り立つ。特に、Connector は教科書の本文内容を自分自身の経験や生活、社会の出来事とのつながりを探る役割を担当する。本文の内容から大きく外れることもあるが、トピックから派生した会話をグループで行うことができるのは本取組の特長の一つである。教師はファシリテーターとして各グループの話し合いを観察し、即興での意見交換が続くよう必要に応じて支援を行い、生徒同士のインタラクションが促進される支持的学習環境を作りだすよう心掛ける。

話し合い活動においては、教師は各グループを観察し進捗状況の把握やトラブルの解消にかかりきりになり、生徒が活動中に何をどのように話しているのか確認できないという問題点があった。そこで、各グループの机の上にタブレット端末または 360 度カメラを配置し、活動を録画するようにした。録画データはロイロノート・スクールの授業支援システムにより管理している。教師は各グループの話し合い内容を確実に把握することができ、生徒の形成的評価、ミニ・レッスンでの教材として活用することができる。

#### 振り返り

活動後、生徒は達成できた点や改善点について話し合い、振り返りシートに記入する。また、話し合いをスムーズに展開する方法や、深い話し合いにするための質問や英語表現の使い方などを意見交換し、クラス全体に共有される。生徒は他のグループでの話し合いの内容や成果が分かり、自分のグループの成果と相対化した自己評価を行うことができる。

### (3) LC での話し合い活動における談話分析

愛媛大学教育学部附属中学校の 3 年生では、2018 年度に LC を 5 回実施した。ただし、第 2 回目 LC は第 1 回目の途中で終わった話し合いの続きを行ったものである。したがって、第 3 回目から第 5 回目の LC が 1 回の授業中に活動を完遂できたものである。グループの会話は文字起こしされ、会話の総語数、各生徒のターンテーク・1 語発話・2 語発話・句レベルの発話・文レベルの発話・日本語使用の回数を整理した。表 1 は、生徒 A の 3 回分の発話データをまとめた例である。指導担当教員によると、生徒 A は英語を得意と自覚している生徒であるが、発表やコミュニケーション活動には消極的であった生徒であったが、LC 指導を通して、コミュニケーション力を伸ばしていると観察されている。

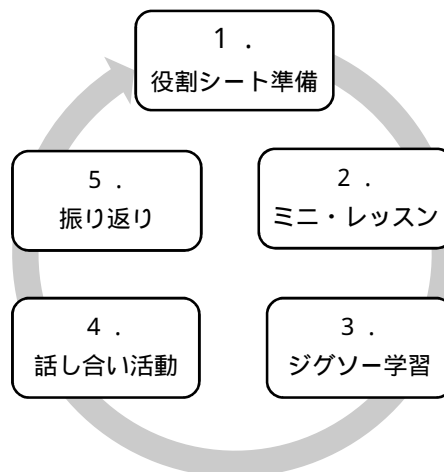


図 1. リテラチャー・サークル指導手順

表 1. 生徒 A の話し合い活動の分析

	第 3 回 (13:07)			第 4 回 (11:47)			第 5 回 (15:00)		
	connector			illustrator			summarizer		
	グループ	生徒 A	占有率 (%)	グループ	生徒 A	占有率 (%)	グループ	生徒 A	占有率 (%)
会話語数	495	122	24.6	516	209	40.5	676	228	33.7
ターンテーク回数	55	13	23.6	66	22	33.3	82	26	31.7
1 語発話回数	8	1	12.5	17	5	29.4	26	9	34.6
2 語発話回数	15	3	20.0	14	5	35.7	21	9	42.9
句発話回数	6	0	0	6	3	50.0	6	3	50.0
文発話回数	60	15	25.0	60	20	33.3	67	26	38.8
日本語使用回数	6	2	33.3	9	3	33.3	5	1	20.0

各回の活動時間が異なり考慮は必要であるが、グループ全体では回数を重ねるごとに会話語数とターンテーク数が増えており、英語での話し合いの流暢さが向上していることが伺える。映像とその文字起こしから、生徒 A は会話語数とターンテーク数が増加していることが分かる。発話のタイプは 1 語発話、2 語発話が増えているが、これらは他の生徒の発言に対する即座の短い応答である。加えて、文での発話が増加傾向にある。したがって、生徒 A は話し合いに積極的に関わり、即興で意見を述べ、他のメンバーに意見を促し、会話のマネジメント能力を發揮していると考えられ、指導教員による上記の観察が妥当であると推察される。

次のあるグループによる会話の抜粋は、物語の主人公が飛行機を操縦し空を飛ぶ練習を重ねるといった内容から、生徒 D がテレビで見たことがある盲導犬のトレーニングの話へとつなげ、さらに、自分がピアノの練習をずっと続けていることを話した場面である。その後、生徒 C のサッカーに対する努力に話題がつながり始めている部分である。LC が主体的・対話的で深い学びに資する言語活動であると考えられる例である。

- D: Have you ever worked hard? In my case, I practiced the piano every day if I wanted a prize.  
 C: Every day. It's good. I can't つづける  
 A: continue  
 C: I can't continue practicing  
 B: Me, too.  
 C: It's good.  
 B: Playing the piano is too difficult for me.  
 C: Oh, I think so, too. OK.  
 D: Have you ever worked hard?  
 C: You play soccer.  
 B: I have played soccer, now I can't ...don't play soccer.  
 C: When did you start playing soccer?  
 B: When I was 6... 7 years old, I began to play soccer. When I was 12 years old,

今後の授業実践における課題も発見できた。例えば、Summarizer は本文の英文とは異なる語句や表現で内容を語るようにしたり、Illustrator は何を描いたかだけでなく、その場面を選んだ理由を説明したりする指導が必要である。それにより、読んだ内容を基に自分の考えや思いを伝え合うことができる豊かなコミュニケーション能力の育成につなげることができると考えられる。話し合い活動の録画と談話分析で個々の生徒の発言内容や表現方法を丁寧に観察し、統合的言語活動の指導と評価の改善に生かしたい。また、話し合い活動の談話分析を進め、LC は中学生の英語使用にどのように影響しているか把握し、指導方法の改善を図り、より多くの教員が LC に取り組むことができるよう指導のシステム化を実現できる研究を行いたい。さらに、話し合い活動における英語使用の調査から、多くの教員が実践する際に参照できる指標とするため、LC 活動における英語使用のベンチマークを学年ごとに設定することが求められる。

引用文献

Daniels, H. (2002). *Literature circles: Voices and choices in book clubs and reading groups (second edition)*. Portland, ME: Stenhouse.  
 三森ゆりか (2013). 『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』. 東京: 大修館書店  
 立松大祐. (2016). 「リテラチャー・サークルを取り入れた授業改善の試み - アクティブ・ラーニング型授業の指導事例 - 」, 『愛媛大学教育学部紀要』, 63, 93-102  
 立松大祐・河野圭美. (2020). 「英文を読んで話し合う協同学習の授業モデルづくり - リテラチャー・サークルの実践から」, 『英語授業研究学会紀要』, 28, 109-120.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 立松大祐・河野圭美	4. 巻 28
2. 論文標題 英文を読んで話し合う協同学習の授業モデルづくり－リテラチャー・サークルの実践から－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語授業研究学会紀要	6. 最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 38
2. 論文標題 主体的・対話的で深い学びにつながる「読むこと」の指導－コロラド州のミドルスクールでの事例－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四国英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐・河野圭美	4. 巻 -
2. 論文標題 教科書のリーディングを起点とした技能統合型の授業づくり－リテラチャー・サークルの実践を通して－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語授業研究学会第30回全国大会発表資料集	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 64
2. 論文標題 アメリカのリテラチャー・サークル指導事例 - EFL教室での指導に向けた示唆 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 立松 大祐, 池野 修, 河野圭美, 河野 操, 濱田眞基子	4. 巻 64
2. 論文標題 論理的思考力と表現力の育成を目指す英語授業の展開ーパフォーマンス課題の充実から考える授業改善ー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Daisuke Tatematsu
2. 発表標題 The benefits and challenges of using literature circles in Japanese EFL classes
3. 学会等名 5th Interdisciplinary Conference in the Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 立松大祐・河野圭美
2. 発表標題 生徒を変えるアクティブ・ラーニング型の言語活動の実践ー生徒は話し合い活動中に何を話しているのかー
3. 学会等名 英語授業研究学会設立30周年記念第31回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 立松大祐・河野圭美
2. 発表標題 英文を読んで話し合うアクティブ・ラーニング型協同学習の指導モデルづくり - 中学校でのリテラチャー・サークル実践からー
3. 学会等名 第31回四国英語教育学会愛媛研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 読み手を育てるアメリカの教室ー外国語科における主体的・対話的で深い学びの実現を目指してー
3. 学会等名 第30回四国英語教育学会香川研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 立松大祐・河野圭美
2. 発表標題 教科書のリーディングを起点とした技能統合型の授業づくり - リテラチャー・サークルの実践を通して -
3. 学会等名 英語授業研究学会第30回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 リーディングを起点とした統合的な言語活動の実践ー大学と附属中学校が連携して取り組む、読んだ英文をもとに話し合う活動ー
3. 学会等名 英語授業研究学会関西支部第30回秋季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daisuke Tatematsu
2. 発表標題 Creating communicative language classroom for Japanese EFL learners: Focusing on the literature circles
3. 学会等名 3rd Interdisciplinary Conference in the Humanities (California State University, Sacramento) (国際学会)
4. 発表年 2017年



〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

立松大祐(2020). 「深い学び」を目指す言語活動について - 中学校での教科書本文を活用した話し合い活動の提案 - , 東書Eネット, [https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/ten\\_download/2020/2020024033.html](https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/ten_download/2020/2020024033.html)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	多良 静也  (Tara Shizuya)  (00294819)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授   (16401)	
研究分担者	池野 修  (Ikeno Osamu)  (70294775)	愛媛大学・教育学部・教授   (16301)	